

『物名』の生々流転

伊 藤 嘉 夫

古今和歌集巻第十は、その部立の通り一卷四七首みな物名の歌である。別に墨滅の歌五首を加えて五二首が、古今集に見える物名の歌である。物名という部立は万葉集には見えず、古今集初見の部立であり、又詠み方の一躰である。和歌史上、忽然として古今集に見え、然も全二十巻中一卷をまるまるこれに当てたほど、撰者たちが興味と関心をもち、珍重もした物名は、一体どうして生れ出たのであろうか。

古今集の物名にある歌についてみるに、題は、うぐひす・時鳥・空蟬・梅・かには桜・李の花・唐桃の花・橘・をがたまの木・山柿の木・くたに・薔薇・女郎花・桔梗の花・紫苑・竜担の花・尾花・けにごし・忍草・やまし・唐萩・かはなぐさ・下り苔・にがたけ・藤・いかが崎・唐琴・唐崎・紙屋川・淀川・片野・百和香・墨流し・おき火・茅卷など、動植物、地名、香、火、食物何でも物の名の文字を歌の中に、歌意とも用語とも関係なく、綴られた文字の中に、字を追っていくとその語になるようにしたもので、たとえば、八かにはざくら∨を貫之が

潜けども水のなかにはざくられで風吹くごとに浮き沈む玉

物名の生々流転

と詠んでいる歌が示すように、誦唱してはまるでわからないが、仮名で書くと、ふと見えて来ると云ったものである。言葉を詠みこむのではなく、言葉の文字を詠みこむのである。これは歌意は八かにはざくら∨と別な水中の玉を詠んでいる。然し又、藤原敏行朝臣の、

心から花の雫にそぼちつうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

来べきほどときすぎぬれや待侘びて鳴くなる声の人を動むる

が、鶯、時鳥を詠んで、歌もそれである。こうした場合もかまわない。詠む事柄と物名は必ずしも相関わない。よみ入れる物名も八あふひ、かつら∨八なし、なつめ、くるみ∨八さき、まつ、びは、ばせをば∨というように、二つ以上の物の名を

いささめに時まつ間にぞひはへぬる心ばせをば人に見えつつ

と詠んだものもある。又

朱雀院の女郎花合せの時に、をみなへしといふ五文字を句のかしらにおきて詠める

をぐぐら山みね立ちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

は、物の名の文字をそのまま詠みこんだものところが、五文字を五つに分けて詠みこんだものである。これは、物の名を文字として詠み入れることにおいては、文字を一続きにしないで分けたというだけで、物の名を詠むということにはかわりがないので、同じく物名の部立に入れてもよいが、文字をとびとびにたどらねば物名とならないので、物名とわけやがて「折句」と云うようになるものである。この躰はすでに一般的にも行われたと見えて、巻九羈旅に

東の方へ友とする人一人二人誘ひていきけり。三河国八橋といふ所に到れるに、その川の辺に杜若いと面白く咲けりけるを見て、木影に下りみて杜若といふ五文字を句のかしらに据ゑて旅の心を詠むとて詠める
在原業平朝臣

から衣きつつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふとあるのと同じ躰。この歌は折句であるが、歌の意を主として羈旅に入れたのであろう。又、巻八離別に

常陸へまかりける時に藤原公利に詠みて遣しける
竈
朝にけに見べききみとし頼まねば思ひたちぬる旅衣なり

とあるのも物名であるが、これも、物名の部立には入れず、歌の意を主として離別に入れたのであった。このような詠みぶりは、可成りひろまっていたものと見える。さがせばまだきつとある筈だと思ふ。

以上のように、古今集に到ってはじめてあらわれた物名は、どうして出現したのか。そして撰者たちにどうしてこのような関心をもたせ、一つの巻をこれに与えたのであろう。

日本文学大辞典には「物名歌」という項を立てて物名について述べている。然し、折句や誹諧は、折句歌、誹諧歌と書いた勅撰集があっても、物名を物名歌と書いた例はない。部立の訓み方はまちまちであるが、折句は△おくりく▽物名は△ものな▽で、△せく▽や△ぶつめい▽ではない。「物の名を歌の意味には関係なく詠みこんだ歌。万葉にも物名歌が、無心所着の歌として収められている。古今集には物名が巻十を占めて四七首あり、それ以後の勅撰集にも見えている。単に物の名を列ねたのみで、感動の自然の表現でないために、歌として何等価値のない作品が多い。……どこまでも遊戯的な域を脱し得ない。物名歌は拾遺集にも……千載集にも……あるが、中世以後衰退したのは当然である。……要するに物名歌も、歌が社交的になり趣向を重んじた時に起った一つの流行的現象と見るべきである」と日本文学大辞典は云っており、一向に物名の出現した理由などは述べていない。又、和歌文学大辞典では「物名」で、「和歌の一躰。真淵はもの名と訓んでいる。歌の内容に関係なく事物の名を詠みこんだ和歌。隠題ともいう。早く万葉集に、無心所着の歌として長忌寸奥麿などの、顕題的な物名歌が見られるが、やがて和歌の社交に伴い、遊戯の一躰として流行し、古今・拾遺・千載の各集には、部立の一になっている」と解説している。両辞典とも万葉集の無心所着の中に、いわゆる顕題的な物名歌があると云っているのは誤解で、長忌寸奥麿のは

さし鍋に湯わかせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ

で、巻十六左註に「右の一首は伝へて云はく、一時に衆集ひて宴飲し

き。時に夜漏三更にして狐の声聞ゆ。爾乃衆諸興麿を誘ひ曰はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物を関けて但に歌を作れと云へれば、声に応へて此の歌を作りきといふ」コンという狐の声だけは意味の外にあるが、饌具、雑器、川、橋など、つらぬいた意味の中によみこんでもとより無心所着の歌ではない。奥麿の八首は△むかはき・青菜・食薦・屋梁▽△荷葉▽△雙六の頭▽△香・塔・厠・屎・鮒・奴▽△酢・醬・蒜・鯛・水葱▽△玉簪・鎌・天木香・棗▽△白鷺の木を啄ひて飛ぶ▽はみな意味のよく通る歌に数種のものが詠みこまれているだけで、古今集の「物名」とは似ても似つかぬもの。万葉には、そのあと、忌部首、境部王、作者未詳各一首あり。これも意味はよく通って、事物を詠みこんである。それから三首とんで

無心所着歌二首

吾妹子が額に生ひたる雙六のことひの牛の鞍の上の瘡

吾背子がたふさきにする円石の吉野の山に氷魚ぞ下れる

がある。左註には、舍人親王が、侍座に令して由る所無き歌を作った者に懸賞を与えると云ったのに、大舍人安倍朝臣子祖父がこの歌をよんで二千文の賞金を得たとある。座興である。無心所着の歌はその字の如く意味が全く通らないことを身上とするもので、物名や数種のことを詠んだ歌は意味は立派に通る。無心所着の中に奥麿は題題的物名歌をなどを詠んでいない。隠題はよいとしても「題題」という言葉はない。

物名歌は八雲御抄のいう「隠題」にあたるもので、両辞典の解説するように、歌が社交的になって来てあらわれたとするならば、万葉集巻十

六あたりに収める社交的な宴歌の場において、当意即妙に、囁目の事物を詠んだり、数種の一を一首に詠んだり、その他戯笑歌があらわれ、無心所着の歌などが出現したのに、なぜ隠し題形式の物名があらわれなかったか。

日本語の漢字による標記は、漢文を取り入れて幾程もなく、種々工夫の結果、散文に先だつて和歌文学の標記法を完成したのである。万葉集巻々を読んでいくと、万葉人たちは、愉しむように多様な標記法を駆使している。音訓意をあざなって、愉しむすぎたところの中には訓み解き難くなったものさへ出てくる。中でも一字一音形式の万葉仮名は極めて慎重に、録音的標記をとったのであった。然し漢字を一字一音の表音的に用いて書いたとは言え、漢字はもともと表意文字であるから、本来の意味性が頭をもたげて、表音だけに止まっていけない。一字が一字だけの主張を消さない。もともとそれ自身に意味を持たない表音文字のような無心の姿になりきれないのである。一字一字が持つ文字の意味が、個を守ろうとする求心性が働き、文字と文字の間に心理的な間が出来る。とび石を伝うように一字一字の音を辿ることになる。例えば東歌の

信濃奈流知具麻能河伯能左射礼思母伎弥之布美豆婆多麻等比呂波牟
於毛思呂伎野乎婆奈夜吉曾布流久左爾仁比久佐麻自利於非波於布流
我爾

伊波保呂乃蘇比能和可麻都可芸里登也伎美我伎麻左奴字良毛等奈久
毛

東歌から三首を白文で出してみた。概ね一字一音である。無心にこれを

ながめていると、おのづから目にとまる文字の意味への関心がおこり、前後の文字への連関の心理がおこり、さてその関連が概念を結ばないとなればそれきりになってしまう。表音的に用いられているという意識をつよく持ち、表意性の本領を發揮しようとする文字の本性をおさえて、その持つ音だけをたどっていかねばならない。この苦勞をせねば、日本語である和歌を、外国文字、然も表意文字の音を借りて写し留めるといふことは出来なかつた。それについても古人の知恵の並々でなかつたのをおもうのである。先日テレビでエスキモーの生活を紹介するのを見た時に、彼等の衆議制による会議で活発な討議の行われている情景を見た。

会議はすべてエスキモー語で行われるが、彼等は文字を持たない。そこでその記録はすべて英語で書かれるという説明があつた。英語の用字はアルハベットで、純然たる表音文字である。表音文字であれば、これでエスキモー語が写されてよい筈である。然し、それは簡単には行かない。万葉集を見ても、日本詩歌が漢字で書写されてはいるが、題詞左註みな漢文である。一行の日本語もないと云つてよい。これは、筆写をする前に散文の成立がなかつたからである。書き言葉があれば、ローマ字で文章が書けるようにそれはたやすい事である。エスキモーにはまだ散文(書きことば)が成立してないのである。

われらの祖先が、散文の成立をまたずに、すでにある歌謡を記録したり、文字をつかつて和歌を作つたりしたのが万葉集であつた。これはかすこい事であつた。然し、用いられた文字が表意文字であつたため、すでに文字と文字の間に空間的にも心理的にも間のあるのをそのまま用い

ることにより、一語が数字で書かれねばならぬばかりでなく、字毎に持つ間と語と語のつづく時に持つ間が全く同じであるという不自然不便があつた。これは表意文字を表音的に用いること自体に出て来るさげがたいものとなつたのである。たとえばはじめから表音文字をつかつて歌をうつつすとしたら、

SINANONARUCHIKUMANOKAWANOSAZARESHIMOKIM
ISHIFUMITTEBATAMATOHROHAMU

などと書くはずはないだろう。

Shinanonaru Chikumano kawano sazareshimo kimishi

fumiteba tamato hrohamu

のように単語か文節かにわけて書かれることであろう。然し、はじめから表意文字を表音的に用いた場合、そうした配慮の発見がなかつた。その抵抗にもなれて、音、訓、意をあざなつた標記法が行われた。アルハベット二六字などとはおよそかけ離れた夥しい数の漢字が思うままに用いられるので、そこに統一はなく、思い思いの標記は、一面からは愉しものでもあつたろう。そしてこの万葉集に於てだけでも、一世紀ほどの間に訓み解けない部分が出来るほど、世に遠いものになつたのは、一方に仮名の發明と普及があつたのによるものであつた。

仮名はいわゆる草仮名、漢字の極めて簡略な草体を一種か二種にしほつて、これを表音文字とした。角の多い漢字では、書くのに手がかかるばかりでなく、視覚によっては、音よりも意味の方がはやく知覚されるのである。草仮名は書くのに早いばかりでなく、漢字の象形性から遠ざか

って、にわかにもとの漢字の思い浮ばぬほどの草体が、表音文字として
あたらしく誕生し、その本領を發揮する事になった。古今和歌集の成立
した頃には、仮名は専ら日本語標記の表音文字として一人歩きが出来る
ようになったのであった。仮名が、ほとんどその母なる漢字との感覚的
連関を断って、表音文字として、一人歩きが出来るようになったのであ
った。ただ一つ惜しいことには、この仮名が、表音文字のほとんど鉄則
というような八分ち書きVを忘れたのであった。前にローマ字で言った
ように、語でも文節でも八分ち書きVをすることを忘れた。

ふたへにまはしてくびにかけるしゆず

というような一つづきの標記は、「二重にまわして、頸にかける珠数」
「二重にまわし 手首にかける珠数」の両様によめる。これが又一つの
やっかいなことになったのである。

前の東歌を一つづきの仮名で書いてみる。

む
しなのなるちくまのかはのさされしもきみしふみてはたまとひろは

おもしろきのをばなやきそふるくさにひくさましりおひはおふる
かに

いはほろのそひのわかまつかきりとやきみかきまさぬうらもとなく
も

と書いてみる。これは万葉集であるから、物名などあるべきはずはな
い。ほしいままに傍線をつけてみた八熊の皮V八尾花V八鎌束Vの物名

になる。もしも、当時、はじめて仮名を用いて歌を標記していた者が、
ふと、記した仮名の中から、思いがけない言葉が現れたとしたら、意外
と、おどろきと、一寸した微笑があったであろう。

仮名がつづけて記載されるときは、もう、漢字が続けて記載された時
のように、文字と文字との間にあった心理的の間や、文字自身もって
いる意味へのいざないは全くなくなって、仮名の文字と文字とは互に引
きあって、意味になろうとする力が働くのである。仮名をはじめて覚え
た幼児が、「う、さ、ぎ。うさぎだよ」と喜びの声をあげるように、読
み解いていく喜がある。八分ち書きVになっておれば、その言葉はその
言葉として確信しつつ読んで行けるのだ。文中にあっても、bookは
bookとわかる。「カネヲクレタノム」が「金送れ。頼む」でなく「金
を呉れた。飲む」と読まれたら、金が来なくて「誰が呉れた飲むな」と
返事が来たりすることになる。その不十分な表示の方法が、文中のかの
一字を見つめている中に、八かーまーつーかVとたどると八鎌束Vとい
う語になる。この面白味ははじめてのものであった。そして、これを創
りだしてみようと思わぬ筈はなかったろう。斯うして古今集の物名は生
れたのであろう。そして盛に試みられたであろう。古今集の物名の作者
中、作者の明らかなものでは、貫之と友則がことに多く詠んでいる。

ペルシャあたりの器物に残っている笑い絵の底ぬけの明るさ、古事記
のみとのまぐはひ、今昔や宇治拾遺のあけっぱなしのはなしなどをみて
も、「遊ぶ子供のさまみれば」我身さへゆるがれると云ったホモ・ルー
デンス、「我おちにきと人に語るな」と云ったり「いざ二人ねん」とい

う、遍昭の明るさは、遊戯心の旺盛さをみせている。物名の流転の姿をみればこれは、そこに遊戯心の盛衰のあとがたどられてあじきないが、その生れいでたころには、その生れた場に生き生きとした旺盛なホモ・ルーデンスの心にふれるのである。

しばらく物名の行方を追ってみる。しかし古今集につぐ後撰集には、物名の部立は消えてしまった。然し物名の根がたえてしまったのではない。つまりこの種の歌が全然ないのではない。巻二十の哀傷歌に、

在原とよ載春がみまかりけるを聞きて

伊勢

かけてだに我身の上と思ひきや来むとしはるの花を見じとは

とあるのは、古今集のきみとしを詠みこんだのと同巧、理由も同じで哀傷の部に入った。これが拾遺集になると、再び古今集の場合と同じように、巻第七の一巻全部が物名で、歌数は古今集よりはるかに多く七八首をかぞえる。ここには藤原輔相という物名の古今独歩といわれる名手が登場して七八首中四〇首を入集している。輔相には藤六集という物名歌集がある。拾遺集のは、折句の様なものはなく、全部が物名である。輔相の

茎も葉もみな緑なる深芹はあらふねのみや、白く見ゆらむ

は、「藤六が多詠が中に尤も躰を得たり。荒船の御社と隠せり。此外は五文字上下はむげにやすし、六字七字もすこしやすくも聞えず。これは九字のよく隠れたるなり。」と八雲御抄に称揚されたのも、概ね古今集にならった動植物、地名その他をよみこんでいる拾遺集の物名の一首。十二支を二首にわけて詠んだり、四十九日しじゅうくじゅういちの文字を詠み入れたりしたの

も珍しい。(四十九日は中陰で、これを音読した証として、言語史上にも資料を与えている。) 拾遺集にも他の部立の中に、

人の召し侍りける男のひとやに侍りて乳母の許に遣しける
忍びつつ夜こそ来しか唐衣ひとやみむとは思はざりしを

などというたぐいのものはある。

僧正行尊まうで来て夜とどまりて、つとめて帰りけるとて、独鉾を忘れたりける。返し遣すとてよめる 大納言宗通

草枕さこそは旅のとならめけさしもおきて帰るべしやは

この歌、金葉集雑上にある。続世継六旅寝床に、「返しおとりたりけるにやえ聞き侍らず」とあり。金葉にも返しはない。これは聞いて言葉が頭れるので、物名の本質にはずれる。八雲御抄に「蕨を藁火と隠したるなど、声こそ異りたれど同物名也。これ等は隠したりと云ふべきに非ず」とあるのにあたる。その後、物名の部立はなくて、千載集に來ると、又部立としてあらわれる。即ち、第十八雑下に、短歌(実は長歌に反歌のついたもの二首)、旋頭歌(三首)折句歌(二首)物名(一首)誹諧歌(二二首)がある。折句歌は、

二条院の御時こいたぶきといふ五文字を句の上におきて旅のころを 源雅重朝臣

駒なべていざ見にゆかむ立田川白浪よする岸のあたりを

なにもあみだの五字をかみにおきて旅の心をよめる 仁上法師

なにとなくものぞ悲しき秋風のみにしむ夜半の旅の寢覚は
の二首、句の上毎に文字をすえたのに加えて歌は共に旅の心を詠んでい

る。句毎の上に字をおいて詠むのが折句で物名と別けている。物名の作者は、和泉式部、定頼、大弐三位、肥後、俊頼、頼輔母、堀河、僧都有慶、登蓮法師で、古今、拾遺の作者はいない。うち待賢門院堀川の

百首歌奉りける時のかくし題の歌、きりきりす、

秋はきりきりすぎぬれば雪降りて晴るる間もなき深山辺の里

にあるように、物名は「かくし題」と呼ばれるようになった。八雲御抄には「物名、是は隠し題なり。物の名をかくして詠む歌也」と云っている。この時代もよく、物名は行われたようで、山家集に

庚申の夜、くじ配りをして、古今、後撰、拾遺、これをむめ、さ

くら、やまぶきによせたる題をとりて、よみける、

くれなゐの色こきむめを折る人の袖には深き香や留るらん

春風の吹きおこせんに桜花となり苦しくぬしや思はん

山吹の花さく井手の里こそはあしうゐたりと思はざらん

「古今に梅を寄す」というのは、物の名の題が「こきむ」で、歌の内容は梅だということである。文字を入れること（物名）と歌の内容（寄す）を条件にしたもので、先にあげた折句も歌の内容を限定していた。いろいろな条件の中に物名の文字を詠みこむのは、おのずから練達を要すること、歌の上手ともてはやされたことであろう。

新古今集を一つとんで、新勅撰集巻第二十の後半に物名の部立があつて二五首を撰んでいる。事物の一つの名の文字を詠みこむものや、

物名の歌よみ侍りけるにやまごとと、かぐら 後徳大寺左大臣

湊やまとはに吹く汐かぜに絵島の松は波やかくらむ

のように二つ以上のものを詠むほか、

春つれづれに侍りければ権大納言公実の許に遣しける 俊頼朝臣

はかなしなを野のを山だつくりかねてをだにもきみはてをふれすや¹

は、数字の順に読めば「花をたつねてみばや」となる。左注に「返しは

せで頓てまうで来ていざさは花尋ねむなどさそひ侍りける」とある。こ

の時代には、別に何と言はなくても、そのように探り読むことが出来た

のであろう。沓冠の一躰である。同巧異曲の

堀河院御時藏人頭にて殿上に侍ひける朝出させ給てこいたじきと

きのふだを沓冠にと仰言侍れば任りける 権中納言俊忠

こしたもといとど干がたきたびのよのしら露払ふきぎの木のした[△]

今一首同じ条件で同じ時に詠んだ橘広房の歌がならべられている。沓冠

も物名の部立の中に入れ、

庚申の夜菖蒲草を折句によみ侍りける 三条太皇太后大弐

あな恋しや重の雲路にめもあはずくるゝ夜な夜なさわぐ心か

折句も同様である。殿上に人々の集った時とか、庚申の夜などのつれづ

れの消閑に、互に詠み競ったようである。更につづいて大弐の歌で

同じ文字なき歌とてよみ侍りける

あふことよ今は限の旅なれや行末しらで胸ぞもえける

が載せてある。物名の部立に入れてあるのにいささか混乱がある。

続千載集巻第八は雑体。これを長歌、(五首)旋頭歌(五首)折句歌

(四首)物名(一五首)誹諧歌(二〇首)にわけている。この集も折句

歌と物名とは別にしている。ここにあげられた折句歌は四首とも沓冠で

ある。物名は、事物の名の文字を詠みこむのに変てつはないが、ここにも「庚申の夜思ふゆかりの人に」と、詠んだ場合が書かれているのや、「木賊、椋の葉」という題もある。(木工の研磨に木賊椋の葉の用いられた証拠としての文化史的興味をひく。) 続後拾遺集は巻七の一卷全部が物名にあてられ、二七首を収める。すなおな物名である。作者は紀友則和泉式部、紫式部、好忠から、当時の作者までである。新千載集は、巻十八雑下の、雑の歌一二四首のあとに、短歌(実は長歌三首) 旋頭歌(二首) 折句歌(二首) 物名(八首) 誹諧歌(一八首) これも折句と物名をわけ、物名はすなおな歌、作者は長能隆信等。「隠し題の歌よみ侍りける時、紫の袈裟を」「後醍醐院の御時、上の男共、明障子といふことをかくし題に仕りける時よめる」など、物名は「隠題」と呼びならわされている。新拾遺集巻第二十下は、短歌(五首) 旋頭歌(三首) 折句歌(六首) 物名(一〇首) 誹諧(一七首) になっている。折句の中には折句沓冠をふくんでいる。二十一代集最後の新統古今集には、巻第十九、雑下に、七五首雑の歌があって、それにつゞき短歌(長歌五首) 折句(三首) 物名(七首) 誹諧歌(一九首) が載せられている。とりたてて云うべきことはない。

勅撰集中物名(折句を出すものをふくむ。)の部立をもつもの、古今集、拾遺集、千載集、新勅撰集、続千載集、続後拾遺集、新千載集、新拾遺集、新統古今集の九勅撰集、部立の物名にふくまれる歌の合計は、二二三首、折句とするもの計一七首ある。正確には物名を部立して折句歌を含むものが若干ある。

古今集では、1物の名の文字を歌意とも語句の意味とも無関係に詠みこんで、音読しては意味の解らないようにした歌。物の名は一つ又は一つ以上を読みこむ。2五字の物の名を、句毎の上に据えて詠みこんだ歌。3二字の物の名を、初句の頭と末句の末にわけて詠みこんだ歌。1と3が「物名」の部立に収められている。

1と3に共通したことは、物の名を文字として歌の中によみこむことである。これが広義の「物名」である。然しその後、1と3は、各、1を「物名」(又は隠題)といい、2を「折句」、3を「沓冠」と称した。この場合、1の「物名」は狭義の物名である。

千載集以後は「物名」と「折句歌」は部立をわけている。「沓冠」の部立はない。「隠題」は部立にはなっていないが、詞書で「物名」のことを「隠題」としている。「沓冠」物名の中で、物名をかねて沓冠がよまれ「折句歌」には、五句の句毎の首尾を押えたものも尠くない。五句の句毎の頭をおさえるのは、尻取歌のうけた者の、歌のはじめの音がきまるのにやや似て、音性がないとはいえない。

物名は一つの興味をもってうけつがれ、宇多院物名合をはじめとする物名歌が行われたりした。江戸に入って、文化二年に「物名和歌私抄」が刊行されている。然し物名は、言語芸術である和歌にとっては、正に異常児で、これは技巧だけのものであるというのでなく、和歌が、文字という空間的表現をとった為、これにささえられ、よりかゝる空間表現であって、言語表現とはいいい難い点にある。(42・2・17)